

舞台裏支える大きな存在

KOOGのきしん者の夏

今年の「こどもおぢばがえり」にも、期間を通して各地から22団体、678人(少年会員470人、育成会員208人)が帰参。受け入れスタッフなどを含めると、合計1千279人が、岡団としておぢばがえりに参加した。

期間中の7月26日〜8月2日にかけては、恒例の「ふれあい広場」がオープン。外部団体の利用もあり、連日、多くの特別ひのきしん者らが、受け入れひのきしんに汗を流した。

「ふれあい広場」では、13種類の模擬店と7種類のゲームコーナーを設置。このスタイルが始まった当時の「マリリンランド」や「カーニバルハウス」を含めると、20年以上続く恒例行事となっている。



この「ふれあい広場」は、参加した子供たちはもちろん、団体引率者や保護者にも大人気。好評の立役者となっているのは、特別ひのきしん者やヤングひのきしん隊などの存在で、多い時で、一日に百

人を超えるスタッフがひのきしんに当たっている。

ひのきしん内容は、詰所内の宿泊や食事のほか、「ふれあい広場」全般の運営、おぢばがえり会場などへの輸送など多岐にわたり、すべては運営局で管理。每晚ミーティングで反省点を話し合い、次の日の運営に反映。教祖の「喜ばさずには一人もかえされん」とのお言葉を胸に、ひのきしんにつとめている。

ひのきしんの感想を聞くと、ほとんどの人が「暑くて大変だけど、子供たちの笑顔が元気をくれる。毎年、この夏を楽しみにしている」、「この『広場』は、子供達と交流できる大切な場所」、「何より活気があっていい。ひのきしんをしていて気持ちいい。



ちがいい」と話す。舞台裏で行事を支えるひのきしん者の方々にとつても、この「ふれあい広場」は、年に一度の大切な存在となっている。

「教祖を身近に」プロジェクト

今回の「こどもおぢばがえり」当日は、新たな試みとして、詰所内で『教祖を身近に』プロジェクト」と題して、「おやさまつて?の会」と「おやさまへおてがみの会」を実施。その他、詰所玄関を各教会の隊長の顔写真で飾り付け、子供たちの笑顔で帰参者を出迎えた。

このプロジェクトは、教祖百三十年祭へ向かう年祭活動に合わせた企画で、大教会の合言葉である「教祖を身近にさあ 今日もおたすけを」に添ったもの。「子供たちにも教祖を身近に感じてほしい」との思いから企画された。プロジェクトの一つ「おやさまつて?の会」では、教祖についての情報を分かりやすく玄関ロビーに大きく掲示。

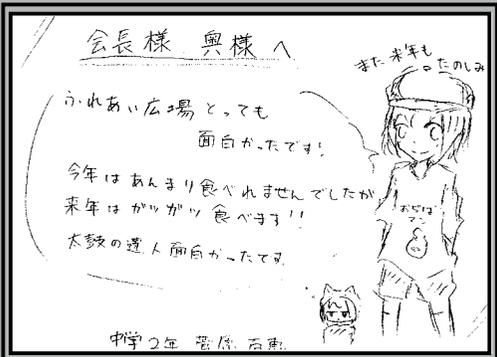
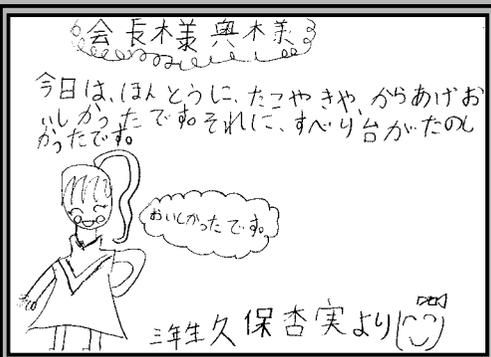
受け入れに当たったひのきしん者数名が、子供たちに教祖に関する問題を提示し、答えてスタンプを集めた人に「ふれあい広場」のゲーム券をプレゼントした。



また、「おやさまへおてがみの会」では、「こどもおぢばがえり」での出来事などを書いて、教祖へのお手紙として投函してもらうもの。手紙を通して、「おぢばへ帰る」ということや「教祖へ自分の思いをお伝えする」ことを少しでも考えてもらおうと立てられた企画で、印象に残る作品には、後日、豪華景品が贈られた。



東日本大震災で被災した岩手教区磐井隊のお友達から29通のお礼の手紙が大教会に届きました。その一部を紹介します。



3年連続 金賞受賞!!

岡団鼓笛隊 アルバトロス



賞の結果が告げられるまでの沈黙が長く感じられ、祈る手にも力が入る。目をつむり、一度きりの本番で練習の成果を出し切った、自分自身の演奏演技をただ信じ続ける――。

「ゴールド!金賞」。結果を告げるアナウンスが聞こえると同時に、観覧席が揺れるほどの歓声が上がった。3年連続の金賞受賞。隊員やスタッフ、保護者の目には、大粒の涙があふれた。

毎月の練習日では、おつとめの鳴物練習やひのきしんにも励んできた。鼓笛隊担当の光武大和さん(須光分教会)は、「毎月の練習では特におつとめ練習に力を入れ、鼓笛を通しておつとめにつながるよう、子供たちは一生懸命がんばってききました。少しの時間ですが、こうした毎月の積み重ねが今年も金賞という結果に繋がったのだと思います」と話す。

今回は、3日の「おやさとパレード」に単独出演し、4日の「鼓笛オンパレード」に出場。両日とも、「カントリロード」を演奏演技し、たくさんのお客を前に、一年間の集大成をおしみなく披露した。